

## 重要な“発見の喜び”

世界的な数学者として著名な、文化勲章受賞者、故・岡潔先生は、“発見の鋭い喜び”という表現で、「発見することの喜び」をあらゆる喜びの中の最高のものだとおっしゃっています。

そして「ひと度この喜びを味わったなら、だれだってこの発見の喜びを求めて、研究に励まざるを得なくなるに違いない」とおっしゃって、この“発見の喜び”を幼い時期にたっぷり味わわせることの重要性を指摘していらっしゃいます。

ところで、幼児期ほど好奇心が強く、絶えず好奇に満ちた目を輝かして新しい発見を求め回る、という時期は他にありません。そして「これは何だろう」「どんな働きをするものだろう」と常に疑問を懐き、その解明に努めます。

だから、幼児期に頭の働きが最も活発で大きく、だから知能が向上するのです。「これは何だろう」「どんな働きをするものだろう」と考えることが頭を働かせることであり、頭を働かせることが知能を向上させるものだからです。

ところが、子供たちが疑問を懐く前に、「これは 　　　 というもので、

するものよ」というように教えてしまう親が少なくありません。こういう育てられ方を受けた子供は、確かに知識は豊富になりますが、頭の働きは必ずしも良くなりません。それよりも何より問題なのは、このような育てられ方をしますと、意欲の強い子供になりにくいという欠点が生じやすいことです。

好奇心は強い意欲の表われであって、これが進歩向上の原動力であり、有難いことに、どの子にも立派に備わっているものです。この好奇心がある限り、子供はひとりで頭を使って思考しますので、知能は自然と向上するわけです。

幼児期には、この「自分の頭を使って思考する」ことが最も大切で、知識を蓄えることなどどうでも良いことなのです。知識を広めるのはいつでも出来ることですが、知能を向上させることは幼児期にしか出来ないことだからです。

「三つ子の魂百までも」という諺は、その意味でも正しい真理であることが、現代の最も新しい科学である脳生理学によって、「人間の思考を司る脳は、その大部分が幼児期に完成される」という事実により証明されました。

## 推理力、洞察力も自ずと発達

もちろん「知識を頭の中に蓄える」という記憶力も知能の一面ではありますが、それよりも「ある知識を基に推理する」という推理力や洞察力などの方がより重要な知能であり、このような能力は、知識の詰め込みに精力が費されているようだと、その発達が妨げられるのです。

だから、“蟻・蜂・蟬”……という漢字を、それらの事物の体験に応じて教えてやるのはよろしいですが、これらの字をよく見てごらん。同じ形をした所があるよ」と教えてやらない方がよいのです。まして「“虫”という所が同じでしょ。これは“むし”という字で……」などと教えてやるとはいけません。

それは幼児から“発見の鋭い喜び”を奪うことになります。そのような知識は与えてやらなくても、幼児に必ず発見できることなのです。早いか遅いかの違いはあっても、必ず気が付くはずです。それまで待つてやるのが大切なのです。

蟻と蜂に共通する“虫”の部分に気付いた子供は目を輝かして、そのことをお母さんに訴えるでしょう。その時「まあ偉いわねえ」と言って

ほめてやり、その上で“虫”について教えてやれば、子供は耳を傾けてこれを聴き、その知識は生きた本物の知識になるでしょう。

これに反して、親の方から一方的に知識の詰め込みをしたらどうでしょう。いくら熱心に教えてやったところで、興味に乏しいので耳を傾けて聴くことが出来ません。従って、その知識は不消化で決して深いものになりません。

その上いけないことは、すでに述べましたように、詰め込み教育が続けていますと、そういう受け身の生活に慣れて、好奇心に目を輝かして意欲的に物を視ることが出来なくなります。そのことが最も恐しいことです。

「知識を与えてやる」ことが悪いのではありません。「求めているのに与える」ことが悪いのです。この「求めているのに与える」ことを“詰め込み”というのです。子供が知識を求めている時に「知識を与えない」ことは惑いことです。

ところが、詰め込みをする親に限って、子供が求める時に、「今忙しいのよ」と言って拒絶するものです。